慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本統治期台湾文壇における「女誡扇綺譚」受容の行方
Sub Title	The whereabouts of acceptance "Zyokaisenkitan" of Taiwan literary world in Japanese colony period
Author	和泉, 司(Izumi, Tsukasa)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2002
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.83, (2002. 12) ,p.20- 42
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00830001-0020

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本統治期台湾文壇における「女誡扇綺譚」受容の行方

和泉　司

※　文中において、日本統治期の呼称として台湾人については本島人、日本人については内地人とそれぞれ表記した。現在では不適切な表現であるが、当時の台湾の人々を「台湾人」「日本人」と表記することは理解に混乱をもたらし、問題を隠蔽することにもなりかねないと判断したためである。また、概念・記号として表記する際には「台湾」と鉤括弧をつけ、地域としての台湾と区別させた。

一　はじめに

佐藤春夫は、一九二〇年――大正九年の七月から十月にかけて台湾を訪れた。これは、谷崎潤一郎夫人との恋愛問題のもつれから逃避するように故郷・新宮に帰郷したとき、偶然再会した中学校時代の友人で、当時台湾の高雄で歯科医院を開業しようとしていた東熙市に誘われたためだと、後に本人が述べている。(1)

そのときの経験をもとに、春夫は台湾に関連するいくつかのテクストを発表した。

その中で、特に注目されることが多いのは、台湾の山地原住民の様子を鋭く描いた「霧社」（一九二五年）、台湾の日本統治の状況を本島人たちとの会談という形で暴いていった「植民地の旅」（一九三二年）、そして、一九二五年雑誌『女性』で発表された、古都・台南の街を舞台とした怪異譚「女誡扇綺譚」である。

前二者が紀行文であるのに対し、小説テクストである「女誡扇綺譚」は、台湾の異国性を十分に描きあげたこともあって、春夫の後に台湾へ渡ったり旅行をしたりした作家たちに「台湾」と共に想起される作品として評価された。同時に、台湾を舞台にした、或いは台湾を描いた代表的な小説とされた。(2)

そして、まさにそのために、「女誡扇綺譚」の位置付けが、問題になった時間と場所があった。それが一九四〇年から四五年までの、日本語文学が最盛期を迎えた頃の台湾文壇だったのである。

二　日本統治期台湾の文学状況

一八九五年に清朝から日本へ割譲された台湾は、その後二十年ほどは抗日武力闘争が断続的に続く不安定な地域であった。この時期の文学活動は、旧支配者層であった本島人の読書人階級の人々による漢詩文創作か、移住してきた内地人たちの短歌・俳句サークルが細々と活動している程度でしかなかった。

台湾に近代文学運動が始まったのは、春夫訪台の時期と前後している。一九二〇年代から、台湾で盛り上がった台湾自治獲得運動という形の穏健的抗日闘争と、中国大陸の改革運動の影響もあって、北京語白話文の台湾への導入という形で文学運動が起こったのである。これは「台湾新文学運動」と呼ばれている。

この運動は、三〇年代初期、総督府の弾圧で自治獲得運動が壊滅した後も、三〇年代を通じて同人文芸誌の断続的な

創刊・廃刊の繰り返しの中で続いていた。この頃には、運動の中心は日本留学経験のある本島人作家に移り、日本語テクストと中国語テクストが共存していた。それによって、内地人もこの運動に参加するようになった。

しかし一九三七年、日中戦争を控えた四月に、総督府の中国語締め出し方針に従って、台湾内部の新聞が一斉に新聞の漢文欄を廃止したことで、当時の文芸誌『台湾新文学』も廃刊に追い込まれた。ここで、台湾新文学運動は中断し、以降二年ほどの間、台湾での文学活動は停滞する。

その停滞を破ったのが、四〇年に創刊された日本語雑誌『文芸台湾』であった。発行編集人は西川満という人物である。満二歳で台湾へ渡り、以後早稲田大学在学中以外はずっと台湾で育った西川は、台湾の炭坑王の息子であったため資金にも恵まれ、雑誌運営は順調に進んだ。しかし、この西川の運営方針・文学傾向に反感を抱いていた本島人作家を中心とするグループが、四一年に入って同人を脱退し、新たな雑誌『台湾文学』を創刊した。

以降、台湾では『文芸台湾』と『台湾文学』の二誌競合が始まった。両誌は分裂という経緯もあり、常に互いを批判し合う形で論争を続けていたが、それが結果的に、終戦とそれに伴う台湾の中国復帰までの間、台湾文壇に空前の活況期を引き起こした。台湾の「日本語文学」と呼ばれているテクストの大部分はこの時期に発表されたものである。

そして、「女誡扇綺譚」の位置付けが問題になるのは、この「日本語文学」の最盛期に重なってくるのである。

三　新垣宏一の追跡

日本内地の作家ではなく、台湾内部から「女誡扇綺譚」に言及したのは、管見の限りでは新垣宏一がその初めの人物である。

新垣宏一は、一九一三年台湾の高雄に生まれたいわゆる「台湾二世」であった。彼は旧制高雄中学から台北高校を経て台北帝大国文科を卒業した、台湾内部で最も理想的なエリートコースを歩んだ人物といえる。

新垣が「女誡扇綺譚」に関心を寄せるようになったのは、実家の近所に春夫を台湾へと誘った東の歯科医院があり、かつて春夫が台湾へやってきたという話を身近で聞いていたことと、三七年、台北帝大卒業後に「女誡扇綺譚」の舞台である台南の高等女学校に教員として赴任したことにある、と本人は述べている。(3)

台北帝大卒業後、一九三七年七月から台南州立第二高等女学校の教員として台南に赴任した新垣宏一にとって、台湾南部という地域は特別なものとなっていた。『文芸台湾』の前身である雑誌『華麗島』に寄稿した詩「廃港」を初め、新垣のテクストの大半は台南に関わるものである。

しかし、新垣は、現在の「台湾文学」研究において、作家としてはほとんど注目されていない。彼が現在研究上取り上げられるのは、先に述べたように、台湾における「女誡扇綺譚」研究の先鞭をつけた人物だからである。

女学校教員として台南に暮らしていた時期に、彼は台南に本社を置く「台湾日報」という新聞に断続的に随筆を寄稿していて、その一部が台南で「女誡扇綺譚」のモデルや舞台を求めた調査報告となっていた。それが「佐藤春夫のこと」「佛頭港記」「女誡扇綺譚と台南の街」(4)という随筆として掲載されている。新垣のこのときの調査は詳細なもので、現在に至るまで「女誡扇綺譚」研究の資料として高い価値を持っている。(5)

この一連の随筆の最初のものである「佐藤春夫のこと」第三回において、新垣は次のように述べている。

（前略）さてこの「女誡扇綺譚」は美しい物語である。ロマンチックな夢のやうな美しい物語である。安平や台

南を未だ見ぬ人は此の「女誡扇綺譚」を読んで、どんなに此の土地をなつかしむことであらうか春夫はロマンチストであるが、センチメンタリストではない。そこが私たちに喜ばれるものの一つである。事実、私は台南に来る時、先づ頭に描いたのは佐藤春夫の「女誡扇綺譚」であつた。私が初めて会つた台南の人々といふのは、生徒たちであつたが、私は教場で「女誡扇綺譚」の街に来た喜びを語つた位であつた。

さうして、安平に遊び、台南の港町方面を其て歩いてみて、私の書き度いと思ふことは、すでに春夫が皆書いてしまつたと慨嘆せずにはゐられなかつた。

ここに、発表から「日本語文学」最盛期までの台湾における「女誡扇綺譚」の位置付けが現れている。この時点では、「女誡扇綺譚」は賛美の対象でしかなく、批判の対象にはなっていなかったのだ。新垣の調査は、モデルや舞台の追跡としては詳細で優れた結果を残していると言えるが、この時点では、彼は台湾を代表するテクストとして賞賛する以外に「女誡扇綺譚」と接する方法を持っていなかったのである。

四　島田謹二「佐藤春夫氏の「女誡扇綺譚」」の発表

新垣の調査とほぼ重なる時期に、「女誡扇綺譚」を総体的に扱った最初の論文が発表された。それが総督府発行の雑誌『台湾時報』一九三九年九月号（二三七号）に「松風子」の筆名で発表された、島田謹二「佐藤春夫氏の「女誡扇綺譚」」（以下、島田論文）である。

島田謹二は一九二九年三月末、一年ほど勤めた東北帝大法文学部の副手から、創立二年目の台北帝大に講師として赴

任してきていた。当時、島田の他、矢野禾積、中村哲、工藤好美、金関丈夫などの台北帝大の教官たちが「別格」的存在として「日本語文学」最盛期の台湾文壇で権威的に活躍していた。また、島田は台北帝大での新垣の恩師でもあり、親交は深かったらしい。

島田は台湾へやってきてから、比較文学の方法論への接近を試み、特にフランス植民地における「外地文学」に関心を持っていた。そこで彼は台湾における「外地文学」という枠組[6]を模索するようになり、在台内地人作家の文学活動に注目するようになった。そして、その意図に従って、島田は「華麗島文学志」というテーマで台湾の「外地文学」史論を構築しようと試みた。「佐藤春夫氏の「女誡扇綺譚」」は、この「華麗島文学志」の一部をなすものとして発表されたのである。

この島田論文の争点は、「女誡扇綺譚」を「エキゾチシズム」[7]のテクストである、と明確化した点にあるとされている。「女誡扇綺譚」は南国である台湾の、異国性を存分に描いたテクストであるという評価が、島田論文以降確定されてしまった、というのである。

この点を強く批判したのは、藤井省三「大正文学と植民地台湾—佐藤春夫「女誡扇綺譚」」（以下、藤井論文）[8]である。実際、島田論文以降、「女誡扇綺譚」を単独で扱った研究はほぼないといってよい状況にあり、触れられるとしてもまず「異国情緒あふれる」という枕が付いていたのは事実であった。その意味で、藤井論文による、「島田論文が「エキゾチシズム」に基づく評価観を確定させた」という指摘は妥当なように思われる。

ただ、ここで考えたいのは、「女誡扇綺譚」が「エキゾチシズム」のテクストであるかどうか、という問題の前にある、このとき、島田論文は「エキゾチシズム」をどういうものとしてとらえていたか、ということである。

島田論文は、「女誡扇綺譚」の素材とその扱い方について、次のように述べている。

（前略）その紀行乃至写生文は平明洒脱な伝統的なものでなく、作者に特有な詩魂のlyrismeを以て貫いた艶冶極まる異国情調文学のそれであるといふこと、即ちその素材は真夏の熱帯の自然といひ、支那系統の文化といひ、ことごとくそれまで日本的伝統（風雅）と考えられてゐたものの埒外に立つて、或は灼熱、或は荒廃、或は瑰麗、或は縹渺、いづれもわれわれ日本人の審美感の未だ十分親熟してゐないものを持つて来て、我らの詩境をはるかに拡め、われらの感性の処女地に鍬を入れたといふことである。

この部分に代表される島田論文の「エキゾチシズム」観とは、「日本性の欠如」に対する反応である。「日本」とは違う部分、「日本」とは相容れない部分への視線を総じて島田論文では「エキゾチシズム」の対象にしているのである。故に、「台湾」を舞台に「台湾」を巡る物語言説を展開している時点で、「女誡扇綺譚」は「エキゾチシズム」のテクストに確定してしまうのだ。島田論文の立場からいえば、「旅行者」の内地人である（つまり台湾とは何のつながりももたない）佐藤春夫の手によるテクストは、「エキゾチシズム」に基づいたものでしかあり得ないのである。しかし、「エキゾチシズム」のテクストと評価することが、「女誡扇綺譚」を貶める評価になるわけではないということは、島田論文が一貫して「女誡扇綺譚」を高く評価していることからもわかる。つまり、島田論文は、「エキゾチシズム」とは日本人―内地人が「台湾」を描く上での不可避の前提としているのであって、「エキゾチシズム」それ自体は評価の対象にしていないのである。

島田論文は、その最後を次のように締めくくる。

（前略）更にまた台湾の内地人文学として、この名品はあとにもさきにも類のない絶品であるが、後来今日の読者としては、これを乗りこえた新らしき作家が続出し、旅行者として見た台湾以外に、ここに根をおろした生活を根抵から剔抉したような散文物語、例せばRichardson夫人やJean Marquetやの外地小説と肩を並べる逸品が踵を接して現はれんことを華麗島文学のために希望してやまないのである。

島田の志向していた「外地文学」は、台湾の内地人作家文学を対象としていた。故に「女誡扇綺譚」は厳密には「外地文学」とはいえず、そのため島田論文で「エキゾチシズム」が強調されもしたのである。島田論文がここで要求している「新しき作家」とは、「外地文学」を支えるべき作家であり、「旅行者」と区別された存在—在台内地人作家のことで、その彼らに期待している「ここに根をおろした生活を根抵から剔抉したような」テクストとは、在台内地人作家による、「エキゾチシズム」から離れたテクストを指している。島田論文では、「女誡扇綺譚」を評価しつつ、その「エキゾチシズム」から離れた文学が生まれることを求めているのである。それは、「エキゾチシズム」とは「旅行者」つまり「台湾」の外部の立場の観点であり、「台湾」内部の立場の観点ではないからである。

つまり、島田論文は、「女誡扇綺譚」論である一方で、「外地文学」前史を語るものでもあったのだ。このとき、「女誡扇綺譚」は「日本文学」から「台湾」という場所で独自に成長していくであろう「外地文学」に接続する、出発点のテクストという評価がされていると言えるだろう。

そして、このような形で島田論文が「女誡扇綺譚」を「台湾」から切り離し、在台内地人作家に「女誡扇綺譚」を乗りこえてほしい、という期待を表明したことが、「女誡扇綺譚」の台湾における位置付けが変容し始める、そのことを象徴している。それまで賛美する対象でしかなかった「女誡扇綺譚」が、島田論文によって詳細に解釈され、「内地人」共有のテクストから「旅行者」という外部のテクストに置き換えられることによって、絶対的なものから相対的なものに変わり始めたのである。在台内地人作家は、「女誡扇綺譚」に憧れるのではなく、受容し、批評し、乗りこえようと、積極的な接近を試みるようになるのだ。それは、在台内地人作家による、旅行者作家と在台内地人作家の区別の意識化の表れであり、旅行者作家――中央文壇の作家に対する植民地――周辺の地方作家のコンプレックス故の反発でもあったのである。

島田論文は、このような在台内地人作家に潜在していた思いを「女誡扇綺譚」へ向けて表面化させるきっかけとして機能したのだ。

五　西川満「赤嵌記」の試み

その「女誡扇綺譚」への接近の中で最も挑戦的であったテクストとして、西川満の「赤嵌記」[9]を挙げたい。

先に『文芸台湾』の編集発行人として指摘した西川満は、自身、詩人・作家として台湾文壇で活躍していた。当時の台湾文壇は、良くも悪くもこの西川満を中心に動いていたと言える。二誌競合期を現出させる契機となった『文芸台湾』を立ち上げたのも西川であり、その後分裂した『台湾文学』が一貫して批判を続け、彼らのアンチ・シンボルだったのも西川なのである。

そのような西川が、まだ『台湾文学』分裂前の一九四〇年末、初期の『文芸台湾』で発表したのが「赤嵌記」である。西川の代表作といわれるこの「赤嵌記」は、「女誡扇綺譚」の影響を強く受け、あるいは非常に意識したテクストであるとされている。

その理由は、先行研究でも常に指摘されているが、その構想の類似性による。[10]「女誡扇綺譚」と同じく古都・台南を舞台にし、そこで主人公の「私」が謎の青年男女に出会うという怪異的な経験をした後、再び台南に訪れ件の男女に会いに行くと、彼らの教えた住所は一般住宅ではなく鄭氏に準じた家臣・陳氏一族を祀る廟であった、という展開、探偵小説を模したような謎解きを展開しながら最後に謎解きを放棄する主人公の在り方などが共通している、というような点が指摘されている。

事実、西川が佐藤春夫を意識していたことは、戦後になって新垣その他の作家によっても指摘されており、「赤嵌記」が「女誡扇綺譚」の影響下にあったことは間違いないと言える。

そして、「赤嵌記」の取材・調査には、その新垣が協力していた。西川は『文芸台湾』第一巻第二号（一九四〇年一月）の「古都台南を語る」という西川・新垣と前嶋信次の鼎談で、[11]台南見物の案内を新垣に求めていると述べ、「赤嵌記」発表前後の『台湾日日新報』掲載の随筆「赤嵌の街を歩いて」[12]では、「赤嵌記」の「陳氏家廟」の場面は、新垣の調査報告をもとに空想して書いた、としている。

この西川が新垣の調査に頼ったことは非常に示唆的である。西川は自他共に認める、実証より空想を、実地調査より書籍からの抽象的な知識を喜ぶタイプの作家であった。故に、「女誡扇綺譚」のように「在地の伝説や言い伝えを取り込みつつ」、「実景を物語空間に書き込む」というテクストの手法を選ぶとき、前者は得意だが後者は全く不得手であ

った。[13]

ここで、その西川の不備を補うに最適な人物が新垣宏一であったわけである。しかし同時に、それはかつて「女誡扇綺譚」の追跡者であった新垣からの影響が及ぶことでもあり、「女誡扇綺譚」と「赤嵌記」の接近の傍証となるだろう。

では、ここで「赤嵌記」と「女誡扇綺譚」との関係を具体的に見てみたい。「旅行者」の内地人による台南の怪異譚が、それを強く意識している在台内地人によって再び描かれるとき、それはどのように重なり、どのように異なったのであろうか。

「女誡扇綺譚」の物語時空を眺めるとき、そこに充満しているのは、登場人物、そして台湾という場所そのものが抱えている「不安定さ」と「曖昧さ」である。内地で食い詰めて台湾へ渡ってきた「私」、日本統治下では無用の存在である読書人の世外民、恋愛の自己決定権を持てない本島人の下婢。彼らは、未だ「日本」なのか「支那」なのか、「台湾」であるのかさえはっきりしない場所で、根無し草のように暮らし、或いは死を選び、或いは酒に逃げ、或いは日本へ帰ってしまうことになる。

一方の「赤嵌記」の時空は、奇妙なくらい「安定」している。主人公「私」は自分が台湾に生きていることに一片の疑問も示さない内地人で、謎の青年男女も戦時下の台湾であるとは思えないほど、時局に無関心なまま、台南の歴史物語に没頭している。

「女誡扇綺譚」は台南を舞台にしていることは確かなものの、登場人物の本名、地名などが微妙にぼやかされている。それが新垣をモデル調査へと駆り立てたのだが、それに対し、「赤嵌記」では「私」の本名が最後には明かされ（そしてそれは作者西川と同名なのだが）、地名は住所番地まで正確に指示される。「女誡扇綺譚」では中途から登場人物たち

が何語で話しているのかあやふやになるのに対して、「赤嵌記」ではいちいち日本語で、北京語で、台湾語で、ときちんと示される。

このように、「女誡扇綺譚」の不安定さ・曖昧さに対して、「赤嵌記」の安定さ・明確さは際だっている。女誡扇綺譚の「私」は常に迷い・悩みを抱えているのに、赤嵌記の私にはそれが一切見られないのだ。

この差異を、まず双方の物語内部の時間から考えてみる。

「女誡扇綺譚」の時間は、文中から、一九一七年前後の時期と考えられる。[14] この時期は、台湾で抗日武力闘争が諦められ、穏健的な権利闘争にシフトし始めた時期であり、中国大陸での改革運動の影響で、中国人としてのアイデンティティに基づいた民族運動が始まる一方、総督府の統治方針が同化政策に一元化し、台湾の「日本化」も本格的に始まるという、台湾内部のナショナリティの所在を巡る揺れが非常に激しい時期であった。

「赤嵌記」の時間は、確定は出来ないがおそらく一九四〇年頃と思われる。[15] これは日中戦争の戦時下で、そしてさらなる大戦争の予感と、日本の南進政策をきっかけに台湾の南進基地化が叫ばれた時期であり、同化が一層強化された皇民化政策が実施され始めた時期であった。

つまり、「女誡扇綺譚」の不安定さ・曖昧さは、時代状況の反映であったとも言える。当時の台湾の人々は、皆日本統治下という環境にどこか食い違いを感じていたわけで、「女誡扇綺譚」はそのような人々の心情を見事にすくい取っていたのである。

「赤嵌記」の安定さと明確さは、「植民地」という不確かな場所を皇民化政策と「日本統治」という論理で覆い隠した上で成り立っているものであり、その意味で、「日本化」が過剰にあふれ出しているテクストであるといえる。では、

何故「赤嵌記」では過剰なまでの「日本化」描写が行われているのであろうか。

在台内地人作家、特に西川や新垣のような外地二世に相当する作家には、その目標が「中央文壇」なのか「台湾文壇」なのか、という問題がつきまとい続けていた。

西川は、『文芸台湾』『台湾文学』競合期を通じて『台湾文学』側から批判され続けた人物だが、その主要な批判の一つが、西川の「中央志向」であった。『台湾文学』側から、西川は台湾文壇を中央進出のための踏み台にしようとしている、という批判が常に続いたのである。

しかし、西川のような在台内地人作家にとって、自身が「日本文学」に参加しているという自覚がある以上、目的地が中央文壇になることは避けられないことでもあった。一方で、台湾文壇の中心人物でもあった西川は、自分が中央では「台湾文壇の西川」としてしか受け入れられないことも知っていた。故に、このようなかたちで、西川が「中央」と「台湾」の狭間で揺れることは必死であったのだ。作家としての西川の位置付けは不安定で曖昧なものだったのである。

この自分自身の不安定さ・曖昧さが、赤嵌記の安定さと明確さを導いたのではないだろうか。自分の不安定さと曖昧さを覆い隠し、作家としての自己を示すために、赤嵌記の時空を「日本化」で描きつくし、安定させ明確なものにしたのではないか。

過剰な「日本化」が描かれていることからも明らかだが、「赤嵌記」を初め、西川の小説テクストは日本帝国主義体制に迎合的なものとして批判の対象となっている。「赤嵌記」の時空にはたしかに当時の深刻な植民地台湾の矛盾や葛藤が全く描かれていない。しかし、それが全く描かれない、ということが逆に台湾が矛盾や葛藤を内包している場所であることを、逆説的に告発していることにもなっているのである。

このとき「女誡扇綺譚」を振り返ってみると、その作者である佐藤春夫は紛れもない日本人の、日本文学史上の重要作家である。このような安定しはっきりした位置に立つ春夫にとって、「他者」である台湾の不安定さ・曖昧さを描くことで、自分自身がアイデンティティの危機さらされる心配など当然なかったのである。

そして「赤嵌記」の最大の特徴は、「歴史」への強烈な希求である。

「赤嵌記」の「私」は、台南で出会った男女の示唆から、鄭氏の歴史が語られている江日昇の『台湾外記』[16]と、陳迂谷の詩集「偸閑集」[17]を読むことで、鄭成功の孫に当たる鄭克〈塽〉を主人公とした歴史物語の語り手に成り代わる。

このとき「私」によって語られる「鄭氏の歴史」は、主に「私」による『台湾外記』の講釈として進むのだが、その中に、「私」の語りが紛れ込んでくる。

（前略）祖父の母は日本人で、それが祖父一代の唯一の自慢だつたと云ふ。してみれば、この俺の五尺の体内にも脈脈として日本の血が流れてゐるに違ひない。この血をいとほしめ、この血の命ずるまま南方に進むのだ。

……

（前略）いや、自分には使命がある。高度国防国家の建設を急務とする今日、個人の自由や平安をかへりみてゐる場合ではない。

この引用は、鄭克〈塽〉の一人語りの部分であるが、当然『台湾外記』にはこのような台詞は書かれていない。この鄭克〈塽〉の独白は、明らかに当時の南方共栄圏構想の文脈で語られているものなので[18]、つまり語り手に回った「私」

は、ここで鄭克〈燮〉にも「日本」を背負わせているのであり、そして「日本人」の血統を意識させることで、皇民化した台湾のイメージを喚起させているともいえよう。

そもそも、「鄭氏」の存在は日本統治期の台湾において、非常に微妙なものになっていた。鄭成功は台湾の解放者として英雄・神であった。そして、その鄭氏一族に、日本人の血が流れている、という因子は、領台当初から利用されていたのである。その顕著な例は、台南市街にある鄭成功が祀られている延平郡王祠の開山神社への改易であった。これは台湾での最大の官幣大社である台北の台湾神社建立（一九〇〇年）よりも早く、領台直後の一八九七年にすでに行われていたのである。

こうして、「日本」とは無縁に語られてきたはずの「鄭氏の物語」は、鄭成功が日本人の母を持っているということを手がかりに、「私」によって「日本の物語」に書き替えられていくのである。そして、この書き替えによって、在台内地人は「台湾の歴史物語」を共有できるようになる—内地人が台湾を「故郷」化出来るようになることが目指されているのである。

このとき、「鄭氏の物語」が台南という一都市の、半世紀足らずの歴史でしかないことは隠蔽され、「台湾大の歴史—正史」に時間的にも空間的にも拡大解釈されていく。

また、本来「正史」の扱いではない『台湾外記』と、歴史書ですらない『偷閑集』が相互補完的に、「日本人性を尊重する」鄭克〈燮〉を正統視する「物語内歴史観」を形成していく。このようにして、「赤嵌記」は「台湾の歴史」を「日本」へすりあわせようとしていたのである。

この傾向は、「女誡扇綺譚」では全く見られない。「女誡扇綺譚」の「私」は、

蘭人の壮図、鄭成功の雄志、新しくはまた劉永福の野望の末路も皆この一港市に関連してゐると言つても差支ないのだが、私はここでそれを説かうとも思はないし、また好古家で且詩人たる世外民なら知らないこと、私には出来さうもない。

と語り、そもそも「台湾の歴史」に関心を示さないのである。

「台湾の歴史」を「日本」へすりあわせていくという「赤嵌記」の姿勢は、やはり帝国主義支配の所産であり、それ自体は批判されなくてはならない。しかし、ここであえて指摘しておきたいのは、「赤嵌記」が「女誡扇綺譚」へ挑戦していく上で、「女誡扇綺譚」が触れようとしなかった「台湾の歴史」に踏み込んでいったことの意味である。

これもやはり、「内地—中央文壇」と、「周辺—台湾文壇」との狭間で、その双方に対してどのような距離を保つべきかを模索し続けている在台内地人作家の苦悩の反映であるとは言えないだろうか。「女誡扇綺譚」が関心を持つ必要もなかった「台湾の歴史」に、「赤嵌記」は関心を持たざるを得ず、そしてそこに介入していこうという乱暴な手段をとらなくてはならなかった。それは、「中央」と「周辺」という関係性から自由になり得なかった植民地二世たちのアイデンティティの揺れの表現であったように思うのである。「赤嵌記」は、「女誡扇綺譚」へ挑戦することで、日本統治下の台湾の矛盾に当事者として直面することになってしまった産物なのだ。

台湾の矛盾・葛藤を隠蔽し、「日本」へすりよせる方向に進んだ「赤嵌記」は、たしかに問題が多いテクストであり、批判を受けるのは当然であるだろう。しかし、「赤嵌記」は、「他者」の立場から台湾を描いた「女誡扇綺譚」よりも、

ずっと困難な立場から生まれたものであったのではないだろうか。

六　まとめにかえて

日本語文学最盛期の台湾文壇の在台内地人たちにとって、「女誡扇綺譚」は「他者」のテクストとして相対化されるものになっていた。

例えば、新垣は「赤嵌記」以後も度々「女誡扇綺譚」に触れているが、「赤嵌記」を境にした新垣の「女誡扇綺譚」評価は次のようなものに変わっていた。『文芸台湾』第五巻第五号（一九四三年）の「台南地方文学座談会」の中で、台南になじみ深い作家の代表として最初に発言を求められた新垣は、このように語り始めている。

新垣　台南と云へば、先づ思ひだすのは佐藤春夫の「女誡扇綺譚」ですね。これはたしかに傑作です。私も台南にきた頭初は、現実の女誡扇綺譚の街を探して、この小説の持つてゐる雰囲気を味はうとしたり、銃楼の家などについて二三考証的なものを書いたりしました。当時はかうした「女誡扇綺譚」のやうな美しさに眼を向ける人が少かつたのですから、先づ、「女誡扇綺譚」からはじめなければならないとかう思つたのです。が長らく台南に住んで、これを何度か読みかへしてゐるうちに、台南の文学はかうしたテーマを取扱ふだけでよいものかどうかと云ふことを痛切に感じ出して来たのです。

新垣の「女誡扇綺譚」への評価は、明らかに以前の賛美から、島田論文が提唱した「乗りこえる対象」へとシフトし

ている。新垣は台南を舞台にした小説も何作か発表しているが[19]、自ら台南を語る立場となる中で、「女誡扇綺譚」と、それが代表する「中央」への反発を意識するようになったのかも知れない。

このように、日本語文学最盛期において、「女誡扇綺譚」は「他者」の位置に置き換えられることで、在台内地人作家の「不安」や「揺れ」をあぶり出す役割を果たしたのではないだろうか。

在台内地人作家にとって、台湾を拠点に文学活動をするということは、自身の糧であると同時に制約でもあった。内地人である彼らは中央文壇の存在を意識しないではいられなかったが、だからといって、台湾内部から自分たちに向けられる批判に無関心ではいられないほどに台湾に根ざしてもいたのだ。

だから、「日本語文学」期の活況は、在台内地人作家に、文学活動の可能性を感じさせると共に限界も示唆したことになる。中央にも走れず台湾にも逃げこめない、という点で、在台内地人作家達もまた、日本と台湾の狭間にあったのである。

もちろん、内地人であるという時点で彼らは台湾においては抑圧者として機能してしまうのであり、そのことを忘れて在台内地人作家の苦悩だけを主張するのは乱暴である。既に多くの研究がなされているように、当時の台湾文壇における最大の問題点は、「被支配者」である本島人作家の苦悩にあるからだ。

ここで、本島人作家による「女誡扇綺譚」の位置付けについて触れておくと、興味深いというべきか、当然というべきか、本島人作家で「女誡扇綺譚」、ひいては佐藤春夫の台湾関連テクストに触れた人物はまず存在していない。彼らにとっては、「女誡扇綺譚」は特別なテクストではなく、他の「日本文学」テクストと変わらなかったのかも知れない。本島人の彼らに、在台内地人が抱いたようなかたちの「不安」や「揺れ」とは無関係であったからだろう。ただもちろ

ん、彼らには「被支配者」であるが故の、次元の異なる困難と苦悩があったことも忘れてはならない。

このように、本島人作家たちの問題に触れず、在台内地人作家を中心に取り上げた形で論じるとき、「支配者」側の人間の弁護をしているのではないかという反発を受けるかも知れない。しかし、今回在台内地人作家たちを問題にしたのは、彼らの「支配者」性を擁護したり、その責任を転嫁させるためではない。

在台内地人作家たちについて論じたいと考えたのは、彼らの「不安」や「揺れ」に立ち向かうことなく、ただ「エキゾチシズム」「中央志向」「支配者」というタームで押し込めてしまうことは、戦後五十数年間、「日本」と「日本文学」が、「日本語文学」の存在を無視し続けてきたことと結局は変わらないことになると思うからである。そのようなタームに当てはめられ、周辺に配置され、放置されることに、どれだけ意味があるだろうか。

そもそも、台湾の「日本語文学」を論じるとき、「他者性」の問題とは、「台湾文学」という文学領域と内地人作家の関係について考えるときに立ち上がった問題だといってよい。すなわち、「内地人作家を「他者」とし、彼らのテクストを「他者」のテクストとすべきか、否か。」という問いかけである。

結果的に、台湾の「日本語文学」、そしてそれを内包する「台湾文学」という文学領域は現在、内地人作家とそのテクストを、自らのものとして引き受けている。それは、「台湾文学」が、民族主義的国家主義的な排他性にとらわれていないことを示しており、そこに「台湾文学」という特殊な文学領域の将来への可能性があるといえよう。

しかし、「内地人作家」と「そのテクスト」とひとくくりにされたものが、果たして等質なものなのか、その内実も検討しなければならない。「旅行者」と「在台内地人」の区別はもちろんのこととして、今回は「在台内地人作家」と一元的に論じてしまったが、当然ながら彼らの内部にも、台湾への移住時期や学歴、一世・二世といった世代のズレな

どによって台湾との距離感に差異が存在していて、それぞれを個別にとらえ直す姿勢も不可欠である。

今回扱った「女誡扇綺譚」は、「台湾文学」がそれを自らに含めるかどうかを議論するまでもなく、「日本文学」として認められている。その物語時空の言説とは裏腹に、「女誡扇綺譚」の位置づけは非常に堅固で安定したものなのである。このようなテクストと、在台内地人作家たちのテクストを同じレベルで論じることはできないのだ。

故に、島田論文がはっきりさせているように、「女誡扇綺譚」に対して言われる「エキゾチシズム」と、在台内地人作家のテクストに対して言われる「エキゾチシズム」も、異なるものとしてとらえ直さなければならない。台湾の「日本語文学」を論じるとき、「エキゾチシズム」の問題を切り離すことは出来ないが、この「エキゾチシズム」という言葉・概念が先行し、その内実についてはあまり注意が払われていないのではないか。

これまでの「エキゾチシズム」観は、「内地からのまなざし」によるものか、本島人作家の立場から「内地人作家を眺める視点」によるもの、のどちらかに偏っている。しかしこの二つの視点の狭間にいた「在台内地人作家」の視点も考慮されるべきである。彼らは内地からは異郷の住人とされ、台湾では中央志向の「他者」とされた。内地にも台湾にも、どちらにも容易に自己の立脚点を見いだせないという点で、彼らもまた、台湾で文学活動をする上で「不安」につきまとわれていたのだ。

日本統治下の台湾で、内地人と本島人とでは、その困難や葛藤の存在は比較にならなかったであろうが、しかし在台内地人にも、彼らなりの困難や葛藤があったはずだ。日本統治下の台湾はまさに「赤嵌記」で行われたような「日本化」の覆いが被された場所であり、その下に生きる人々は、皆その「帝国の論理」に振り回されていたのである。

「台湾文学」がこの時台湾に関わって生じたテクストを全て引き受けていくならば、在台内地人作家とそのテクスト

への個別の検討もまた避けては通れない。

そして、「台湾文学」がその問題に立ち向かっていくとき、「日本文学」は一体どうしているのか。「台湾文学」が引き受けようとしている「日本語文学」は「日本文学」であるのか／ないのか。「周辺に整理し、放置」することを続ける限り、「日本文学」はこの事態に向き合うことが出来ないだろう。

「女誡扇綺譚」受容の行方は、「日本文学」が日本の周辺国家・地域に残してきた「日本語文学」との関係の行方を問うているものでもある。それは「日本語文学」から目をそらしてきた「日本文学」の、「近代国民文学」として持つ排他性への重要な問い直しでもあるのではないだろうか。

注

(1) 東熙市との再会、訪台事情などは春夫の台湾関連テクストの一つである「かの一夏の記—とぢめがきに代へて」(一九三六年刊行の単行本『霧社』所収)を参照した。

(2) 佐藤春夫以外で、台湾を舞台としたテクストを数多く発表した作家では、宮崎中学校から旧制台北高校に進学した経験を持つ中村地平を挙げることができる。その他、北原白秋や佐多稲子などが訪台し、後紀行文を発表している。「日本統治期台湾文学　日本人作家作品集」(緑蔭書房　一九九八)別巻(内地作家)参照。

(3) 新垣宏一自述／張良沢訳「華麗島歳月」『淡水牛津文芸』第七—八期(二〇〇〇年四月—七月　台湾)参照。

(4) 「佐藤春夫のこと」(『台湾日報』一九三八年十一月一・三・五日に掲載)
「佛頭港記」(『台湾日報』一九三九年六月)
「女誡扇綺譚と台南の町」(『台湾日報』一九四〇年四月～)
但し「佛頭港記」は未見、「女誡扇綺譚と台南の町」も国立成功大学図書館所蔵分(全六回掲載中の後半四回分)のみしか見ていない。

(5) 「定本佐藤春夫全集」（臨川書店）の「女誡扇綺譚」註の中でも、新垣の記事は資料として引用されている。

(6) 島田謹二の提唱した「外地文学」の枠組と、島田の「エキゾチシズム」の把握については藤井省三『台湾文学この百年』（東方書店　一九九五）、邱若山「「女誡扇綺譚」とその系譜」（近代日本与台湾検討会　発表論文　二〇〇〇）、橋本恭子「島田謹二『華麗島文学志』の研究対象について」（二〇〇二）を参照した。さらに具体的な島田の「外地文学」について、台湾・精華大学大学院に在籍中の橋本恭子氏のご意見を参考にさせていただいた。

(7) 「エキゾチシズム」とは、ここでは「日本語文学」最盛期の台湾文壇において争点となった文学傾向に限定した意味で用いている。なお当時は「エグゾティズム」「異国情緒」「異国情趣」「異国情調」など表記が複数存在していたため、本論では便宜的に「エキゾチシズム」に表記を統一した。

(8) 藤井省三前掲書所収論文。

(9) 『文芸台湾』（一九四〇年）発表。四二年十二月に東京の書物展望社から『赤嵌記』として単行本化し、四三年二月には台湾・皇民奉公会の第一回台湾文化賞を受賞した。西川満の散文における代表作といえる。

(10) ここで参照した先行研究は藤井論文、邱前掲論文と、奥出健「西川満の文学と台湾」（近代日本与台湾検討会　発表論文　二〇〇〇）井東襄『大戦中に於ける台湾の文学』（近代文藝社　一九九三）。また、未見だが陳藻香「日本領台時代の日本人作家―西川満を中心として」（東呉大学日本文化研究所博士論文）では、「赤嵌記」と「女誡扇綺譚」の関わりは否定されているとのこと。

(11) 前嶋信次は一九二八年に渡台し、以降満州へ渡るまで十二年間台湾に在住。台南等で民俗研究を行っていたらしい。この鼎談当時は台南第一中学校の教員だった。戦後は慶応義塾大学に在職。『〈華麗島〉台湾からの眺望　前嶋信次著作集3』（平凡社　二〇〇〇）参照。

(12) 掲載は四〇年十二月の十、十二、十四日の三回。後に編集され、『文芸台湾』（四〇年　第二巻第五号）の「保祐平安」という随筆欄に再掲された。

(13) このような西川の文学傾向が、特に『台湾文学』派からの批判の対象となった。このとき『台湾文学』派は西川を「エキゾチシズム」「ロマンチシズム」傾向が激しすぎると指弾したのだが、西川批判において「エキゾチシズム」と「ロマンチシズム」の両者は分かちがたく、つまり島田論文が論じているような意味での「エキゾチシズム」とは異なるも

のであった。しかし、島田謹二と西川満は親交が深く、島田が西川の文学活動を一貫して評価していたために、この両者の『エキゾチシズム』観が混同されたままの状況が、現在まで続いており、「日本語文学」研究の上で、再考が求められている重要な問題点の一つといえる。

(14)(15) 「女誡扇綺譚」の物語時間の判断は、テクスト中の

(この二三年後に台湾の行政制度が変つて台南の官衙でも急に増員する必要が生じたとき…

という部分から行った。ここで述べられている行政制度改革とは、一九二〇年に台湾で実施された地方自治制度改正と思われるため。

「赤嵌記」の時間は、「私」が西川本人を意識させていること、そしてその西川が「市の公会堂」で講演したのは三九年末だったことから判断した。

(16) 江日昇『台湾外記』は福建人である江がまとめたもので、鄭芝竜以下鄭氏四代の事跡を詳述したものだが、史実というよりは伝奇小説に近い。一七〇四年（康熙四三年）に刊行されている。葉石涛著／中島利郎・澤井律之訳『台湾文学史』（研文出版　二〇〇〇）参照。

(17) 陳迂谷（一八一一―六九）は台湾北部では林本源家と並ぶ名家の出身。長じて挙人となり大陸で任官し、帰台後は台北・学海書院の主講となって人材の育成に努めた。「偷閑集」はその詩七百首を収めている。葉前掲書参照。

(18) この指摘は藤井前掲論文「台湾エキゾチシズム文学における敗戦の予感―西川満」に詳しい。

(19) 特に小説を挙げると「城門」（四二年　第三巻第四号）「盛り場にて」（四二年　第四巻第一号）「訂盟」（四二年　第五巻第一号）などがある。全て『文芸台湾』発表。戴嘉玲編「新垣宏一先生年譜初稿」『淡水牛津文芸』第七期（二〇〇〇年　七月）参照。

付記　本稿は平成一四年六月の日本台湾学会分科会「台湾文学における佐藤春夫とその系譜」における発表と、同じく六月慶應義塾大学国文学研究会における発表とを、まとめて再編したものである。